

中学校における自主性を伸ばす教育方法の開発(1)

井上 史子*¹ 沖 裕貴*² 林 徳治*³

【概要】先行研究¹⁾において、筆者らは、学校教育目標に用いられる「自主性の育成」や「自主的に活動できる生徒の育成」などの情意的目標を科学的、客観的に測定し、それらを育成する有効な方法論を確立するための指標として活用すべく自主性尺度の作成を試みた。その結果、自主性を構成する6つの因子を抽出するとともに、20の質問項目からなる100点満点(各質問5点満点)の尺度を作成した。

本研究では、作成した自主性尺度を用いて中学校3校で自主性調査を実施し、その結果の差異について教育方法や地域的特性などに基づく分析(水平分析)と、各学校における経時変化に基づく分析(垂直分析)とにより、どのような取り組みや学習活動が中学生の「自主性」の育成に有効であるかを検証する。

【キーワード】自主性、中学校、情意的教育目標、客観的評価、質的分析

I. 自主性尺度について

学校において情意的教育目標の達成度を客観的に測定し、それらを育成するための有効な方法論を確立することは、学校教育における説明責任(アカウンタビリティ)を果たす上でも重要である。

先行研究において、筆者らは、自主性を「自己と環境との関係において自我の確立に対する妨害的条件を積極的に排除し、自己の力で処理しようとする意志や態度、能力などを包括した広義の傾向である²⁾」と考え、学校教育において評価され得る態度や傾向であるととらえた。その上で、藤原(1968)³⁾による自主性調査を基に学校における中学生の自主性を測定するための尺度構成を行い、その結果、20の質問からなる100点満点(各質問5点満点)の尺度を完成させた。

表1に、完成した自主性調査項目を示す。

表1 自主性の因子別質問項目例

	構成因子	質問項目例
1	自己統制	自習の時でもまじめに勉強する
2	独創性	たくさんの人が賛成するとすぐそれが正しいと考える
3	自己主張	自分が正しいと思えば仲良しの友達とでも口論する。
4	独立性	自習の時でもまじめに勉強する。
5	判断力	自分がやろうとすることが人の迷惑になるかどうかよく考えてからする。
6	自発性	遊びやスポーツに自から友達を誘う。

本稿では、作成した自主性尺度を用いて中学校3校で実施した調査の結果と、各校の教育目標や地域特性など水平分析を行った結果について報告する。

II. 自主性調査について

(1) 対象

本研究の調査対象は、以下の通りである。
表2 調査対象とした3校の生徒数

	K中学校	S中学校	N中学校
第1学年	91名	89名	126名
第2学年	81名	84名	109名
第3学年	102名	74名	141名
全体	274名	247名	376名

注1: K, S中学校は山口県内, N中学校は京都府内。

注2: 数字は普通学級の生徒数。

これらの学校を選択した理由は、生徒の自主性の育成に関して校内研修などが実施されており、継続的な調査協力が望めることなどによる。

(2) 時期および場所

時期：平成17年6月

場所：各校の普通教室

(3) 方法

担任が質問紙を配布し、一斉に記入した後、その場で回収した。配布の際、担任は回答結果の集計に一切関与しないことを生徒に伝えた。

(4) 質問内容

本調査で用いられた質問は、性別を問う質問

*1: Fumiko INUE : 山口市立川西中学校 e-mail= purima@b.dion.ne.jp

*2: Hiroataka OKI : 山口大学大学教職機構大学教育センター

e-mail=oki@yamaguchi-u.ac.jp

*3: Tokuji HAYASHI : 山口大学教育学部 e-mail=hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

を含み、全部で21項目である。質問は、性別を除き、回答を5段階評定尺度法で求め、すべて「1. あてはまらない」-「5. あてはまる」の中から択一で選択するものとした。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 有効回答数

本研究に用いた有効回答数は、欠席者などを除き、回収された844名分である。3校の比較検討には、全項目に記入のなかったものや不適格値とみられるものを除いた758名分のみを使用した。不適格値は、①「3. 3. 3. …」などの同じマーキングのもの、②それぞれ同じ因子である設問2と9、3と6、7と8、11と12、15と18について、回答が「5」-「1」および「1」-「5」となっているなど整合性のないものである。

(2) 分析方法

回収された回答に対し、21項目に関して「学校ごとの平均総得点の比較」「学年ごとの平均総得点の比較」「学校ごとの因子別平均得点の比較」「学年ごとの因子別平均得点の比較」を行った。そして、その差異について、各校の教育方針や地域特性などに関するアンケート調査および聞き取り調査を行った結果を基に質的分析を行った。

(3) 分析結果

①学校ごとの平均総得点の比較

表3 学校ごとの平均総得点

	K中学校	S中学校	N中学校
第1学年	64.65	61.88	60.98
第2学年	60.68	62.91	59.08
第3学年	62.22	60.88	60.68
全体	62.59	61.93	60.31

5点×20問=100点満点

分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、平均総得点に関して、第1学年ではK中学校とN中学校の間に5%水準、第2学年ではS中学校とN中学校の間に5%水準、全体ではK中学校とN中学校の間に1%水準の有意な差が認められた。

②学年ごとの平均総得点の比較

表4 学年ごとの平均総得点

	第1学年	第2学年	第3学年
K中学校	64.65	60.68	62.22
S中学校	61.88	62.91	60.88
N中学校	60.98	59.08	60.68
全体	62.30	60.64	61.25

5点×20問=100点満点

分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、K中学校において第1学年と第2学年の間に5%水準で統計的な有意差が認められた。

③学校ごとの因子別平均得点(各因子5点満点)の比較

表5 学校ごとの因子別平均得点

	K中学校	S中学校	N中学校	全体
自己統制	3.61	3.44	3.16	3.37
独創性	2.98	3.10	3.07	3.05
自己主張	3.12	3.04	3.04	3.07
独立性	2.21	2.25	2.29	2.26
判断力	3.71	3.57	3.52	3.59
自発性	3.02	3.05	2.96	3.00

分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、[自己統制]に関してK中学校とN中学校およびS中学校との間に1%水準、[判断力]に関してK中学校とN中学校との間に1%水準の有意差が認められた。

④学年ごとの因子別平均得点(各因子5点満点)の比較

表6 K中学校の学年ごとの因子別平均得点

	第1学年	第2学年	第3学年
自己統制	3.96	3.44	3.45
独創性	3.02	2.81	3.08
自己主張	3.06	3.12	3.18
独立性	2.01	2.27	2.34
判断力	3.96	3.60	3.59
自発性	3.21	2.90	2.94

K中学校においては、分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、[自己統制]に関して第1学年と第2学年および第1学年と第3学年の間に1%水準で、[独立性]に関して第1学年と第3学年の間に5%水準で、[判断力]に関して第1学年と第2学年の間に5%水準で、第1学年と第3学年の間に1%水準で有意差が認められた。

表7 S中学校の学年ごとの因子別平均得点

	第1学年	第2学年	第3学年
自己統制	3.44	3.59	3.29
独創性	3.10	3.15	3.05
自己主張	3.10	2.99	3.02
独立性	2.18	2.19	2.43
判断力	3.54	3.73	3.43
自発性	3.09	3.09	2.96

S中学校においては、分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、学年間において有意な差は認められなかった。

表8 N中学校の学年ごとの因子別平均得点

	第1学年	第2学年	第3学年
自己統制	3.33	3.07	3.06
独創性	3.02	3.06	3.13
自己主張	2.89	3.04	3.18
独立性	2.13	2.31	2.44
判断力	3.74	3.31	3.47
自発性	3.11	2.86	2.89

N中学校においては、分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果、[独立性]に関して第1学

表9 各校へのアンケート調査結果

		山口県内K中学校			山口県内S中学校			京都府内N中学校		
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
基本調査	生徒数	93名	82名	102名	96名	84名	81名	127名	109名	141名
	教職員数	22名			25名			23名		
	学校教育目標	①自ら学ぶ意思・態度の育成に努め、生涯学習の基礎を培う。②自発的・主体的な生徒活動や継続的な体育活動を推進する。			①生徒会を中心に、生活や学校行事に生徒の主体性を活かす。②明るく意欲的に活動できる生徒の育成を図る。			①自ら学び自ら考え主体的に判断する生徒を育てる。②自主的自律的な生徒を育てる。		
	学年教育目標	1年: 明るく自主的に活動する生徒、相手の立場を考えられる生徒の育成を図る。 2年: 広い視野に立った正しい判断力のもとに、自主的・主体的に活動する生徒の育成を図る。 3年: 2年と同様			1年: 自分の良さを見つけ伸ばす中で、明るく意欲的に活動できる生徒の育成。 2年: 自ら考え、自ら行動できる生徒の育成を目指す。 3年: 学校生活の様々な場面で後輩をリードし明るく意欲的に活動できる生徒の育成			1年: いろいろな体験や行事を通して、健全な友達関係をつくり、個々の自主性・自立性を向上させる。 2年: 人間としての「生きる力」の源になる豊かな心を育む。 3年: 豊かな体験活動を通して、自主性・自立性を向上させる。		
	地域の状況	会社員・公務員などと農業との兼業の家庭が多く、三世帯家族も多い。近年、宅地開発が進み転入世帯数も増えている。地域の学校への期待は大きい			市の中心部に位置し、校区はほとんどが市街地である。保護者には公務員や頻りに転勤する会社員が多い。地区住民の教育に対する関心度は高い。			農村地帯に新興住宅地が増え、都市化が進み地域との関わりで二極化している。家庭の教育力の弱さが、生徒の規範意識の低下を招いている。		
総合学習	年間授業時数	1年 70時間	2年 85時間	3年 95時間	1年 85時間	2年 85時間	3年 85時間	1年 100時間	2年 102.5時間	3年 130時間
	テーマ設定	どちらかと言えば学校主導			どちらかと言えば学校主導			どちらかと言えば学校主導		
行事	主体	どちらかと言えば教師主体			どちらかと言えば教師主体			どちらかと言えば教師主体		
問題傾向	生徒の概数	1年 1名	2年 4名	3年 2名	1年 0名	2年 0名	3年 2名	1年 0名	2年 3名	3年 5名
保護者	教育への関心	全体的には子どもの教育への関心は高く、学校教育にも協力的である。地域の学校への関心も高い。			子どもの教育への関心はかなり高く、学校教育に対して協力的であり、PTA活動も活発である。			家庭の教育力が弱い家庭がある反面、過保護の家庭もあり、それが学校教育への関心を二極化している。		

注1: 生徒数には特別支援学級の生徒を含む。

注2: 問題傾向は非社会的・反社会的両方を含む。

注3: 記述による回答は、考察に必要と考えられる部分の抽出のため、筆者らにより簡略化した。

年と第3学年の間に1%水準で、[判断力]に関して第1学年と第3学年の間に5%水準で有意差が認められた。

(4) アンケートおよび聞き取り調査結果

各校へのアンケート用紙は、基本調査および筆者らが自主性の育成に関与する可能性が高いと考えた項目で構成した。

聞き取り調査は、アンケート調査の分析結果から推察される、自校の生徒の自主性に関与する主な要因について、それぞれの学校の教職員から回答を得た。但し、生徒のパーソナリティなど、3校が同一基準で回答できない項目については、今回の調査内容からは除外した。

表9、表10に、各校のアンケート結果および聞き取り調査結果を示す。

表10 教職員への聞き取り調査結果

	学校ごとの平均総得点の結果について	学年ごとの因子別平均得点結果について
K中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いた冷静な判断がくだせる生徒が多い反面、自発性や独立性に欠けるのは、校区の雰囲気や状況を反映する結果のような気がする。 ・他の地域に比べ三世帯同居の家族が多く、大人の援助があることが独立性の低さに繋がっているのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生については学年が一番下ということもあり、諸活動において上級生に依存する場面が多いと考えられる。 ・訓練が足りない。返事をきちんとする、大きな声で発表させるなどの基本的な行動が2年生は身につけていない。
S中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的きまり事を守ろうと言う意識が高い。これは、小学校での指導や家庭教育の積み重ねによるものだと思う。 ・きまりを守ったり皆でやろうという意識が強い。ほとんどが普通科進学といった地域環境(画一的価値観)がその意識の土壌になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生の自発性が低いことは納得できる。小学校時代からリーダーがいなかったと聞くが、その状態が3年かけても改善されていない。 ・3学年は人数が少ないため、その中で集団からはずれることなくやっという気持ちや、自己主張の低さにつながっていると思われる。
N中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の校風として規範意識の醸成が弱い。 ・学校の内外で自主性・自律性を育てる機会が減っている。 ・学校行事以外での生徒の自主性・自立性を育てる活動が弱い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生については、1年生のときより生徒指導上の課題が多く、学校生活の乱れが深刻な状況であった。 ・男子は基礎学力が身につけていない生徒が多い。

注: 回答は、考察に必要と考えられる部分の抽出のため、筆者らにより簡略化した。

アンケート調査より、いずれの学校も教育目標や学年目標の中に「主体性」や「自主性」に関する文言や項目が取り入れられているにもかかわらず、総合的な学習や学校行事は教師主体で行われている。年間100時間におよぶ総合的な学習や学校行事の運営のあり方が、生徒の自主性を育てる一つの鍵となると考えられる。

教職員に対する聞き取り調査からは、生徒の自主性に対して「地域環境」「学校内外での活動の有無」「家庭教育」が影響すると教職員が考えていることがわかった。

また、学年ごとの因子別平均得点の結果より、「上級生への遠慮や依存心」「横並びの価値観」「問題行動の有無」「学力の程度」「生徒数」などが生徒の自主性に影響すると考えている様子も窺えた。

IV. まとめ

本研究は、学校教育目標に用いられる情意的教育目標を達成するために有効な方法論を確立することを目的としている。

今後の課題としては、次のような点が考えられる。

- ① 今回の調査から得られた結果の分析をさらに進め、自主性に関与する要因について明らかにすること。
- ② 各学校における経時的変化に基づく分析(垂直分析)を行い、どのような取り組みや学習活動が「自主性」の育成に有効であるかを検証すること。
- ③ さらに多くの学校への調査を実施することにより、自主性を育成するための普遍的な教育方法を確立すること。

筆者らは、今後、本調査を通して得られた知見を活かし、学校における情意的教育目標を達成する有効な方法論を確立するため、継続して研究に取り組む予定である。

【引用・参考文献】

- 1) 井上史子, 沖裕貴, 林徳治: 「中学校における自主性尺度項目作成の試み」, 日本教育情報学会第20回年会論文集, pp. 62-65, 2004
- 2) 新堀通也: 「教育目標としての自主性とその教育」, 児童心理第31巻第12号, pp16-23, 1977
- 3) 藤原喜悦, 石川勤: 「自主性診断テスト」, 金子書房, 1973